

海軍監査局監察課の日々

きっかけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、深海棲艦が突如世界の海を侵略しほぼすべての海域を制圧しかけ人類が敗北かと思われた時突如現れた「艦娘」。

人類と艦娘が共闘し深海棲艦との戦闘も膠着状態になつた時日本という国は全国の沿岸や島嶼部に鎮守府、警備府、泊地を設置した。ほとんどの所はそこから出撃をし、懸命に戦闘してこの国に勝利をもたらすために戦っていた。しかし、一部は艦娘を自分のモノとして私利私欲のままに扱つていたり、不眠不休で任務に従事させるなどの行為が行われていた。

そのようなことを取り締まるべく出来た法律「艦娘人権法」

これはその法律を行使して艦娘を助ける鎮守府監察課の物語である。

プロローグ | 目次

プロローグ	
第一話	副課長と瑞鳳
第二話	食堂での対決
第三話	監査局本部と愉快な仲間たち
第四話	訓練と情報の大切さ
	43 33 25 15 1

プロローグ

月がない新月のよる。闇夜に轟くヘリのローター音。山と山を縫うようにヘリコプターが飛び抜ける。

その機内では完全武装の8人が乗っていた。雑談などはしておらずただメインローターが空気を切り裂く音が響いていた。ヘリのドアが空いているため風が入り込み肉声がほぼ聞こえないので、パイロットはインカムで告げる。

「総員に告ぐ。目標まであと5分。」

それを聞いた隊長らしき人物がインカムで応答し、指示を出す。「了解、総員最終装備確認。」

「「「「応！」」」

それを聞いた隊員達が自分の装備に不備がないか確認した。自分で見えないところは隣の人見てもらいつつ全員が装備確認をする。コツクピットではパイロットと本部マジックと目標への最終アプローチの確認をしていた。

『Magic. This is Nomad 61. Final approach. Please landing area information. over. (マジック。こちらノーマッド61。最終アプローチング中。着陸地点の情報を知りたい。)』

しばらくしてマジック本部のオペレーターからの返答が来た。

『Nomad 61. This is Magic. Clear and to landing area. Operation launch, Repeat operation launch. over (ノーマッド61。こちらマジック。着陸地点はクリア。作戦開始。繰り返す、作戦開始。)』

『Copy that. out. (了解)』

一通りの無線交信を終えたパイロットはインカムを使って報告する。

「班長！オペレーションスタートです！」

班長と呼ばれた女はパイロットに返答し、部下達に無線越しで状況を説明する。

「了解！さて諸君、現在のパー^{状況}ティの内容を説明する。当該鎮守府は担当憲兵を鎮守府外へ放り出した。まあ、うちらとしたらちよーいい状況になつたわけだ。しかし、あのクソは自分の私兵を雇つて武装したらしい。というわけで今回の目標はパッケージの救出及びクソの逮捕だ。もし、私兵が武装していた時は交戦を許可する。確実に排除しろ。」

「「「「応！」」」」

男達はヘリのエンジン音に負けじと声を張り上げた。女は男達を答えを満足しながら聞いていた。そしてにこやかに笑つた。

「よろしい。それでは作戦の最終確認を。ハンニバル。」

女は隣に座つていた男に話を渡す。男は

「はっ！それでは最終確認をする。」

ハンニバルと呼ばれた男はそこから説明を始めた。

「今日はエアボーンで降下する。降下した後は私と班長の班に分かれ行動する。後のことば班長と同じである。またこの鎮守府に地下に営倉がある。班長の第一分隊は警備室、執務室の制圧と提督の逮捕。自分が率いる第二分隊は地下営倉の制圧をする。艦娘がいた場合は保護をする。では、班長。いつものを。」

ハンニバルが一通り話し終えて班長に出撃前の声出しを頼む。

班長はそのいつものを言うために大きく息を吸つて、言葉を発する。

「はいよ。この部隊の必ず守る交戦規定はただ一つ！」

「「「「生き残れ！」」」」

「行くぞ！」

「「「「応！」」」」

当該鎮守府 執務室

この中には直立不動の1人の艦娘。そしてここに提督である肥満の男がいた。

その提督は机を叩いて立ち上がり怒鳴り散らした。
「なに!? もう一度言つてみろ!!」

直立不動の艦娘は涙目になりつつも目を鋭くして、必死に受け答えしていた。

「ですから！ もうここに艦娘たちも限界です！ どうかどうか1回でもちゃんととした治療を受けさせてあげでください！」

そう嘆願をしているのは軽空母 鳳翔であった。鳳翔は軽空母だからと言われば正規空母が入つてくると出撃も無くなつたため、食堂で働いたり、勉強を教えていたりしていた。皆からは鳳翔さんと親しきれていた。しかし、近頃皆がボロボロのまま外を歩いているのを見て何事かと聞いた。すると、禄に入渠^{ドック}もしてない聞いて怒りのあまり執務室へ駆け込んだ。

提督はその鳳翔の言葉に耳も傾げず近づいて平手を放つた。

左頬に鋭い痛みが走り、鳳翔は倒れ込んだ。

提督はまた怒鳴る。

「うるさい！ 兵器如きに何がわかるというのだ！ これ以上口答えする」と営倉送りにするぞ！」

鳳翔は倒れていた体を起こして提督をにらんだ。そして交渉を持ちかけた。

「私はどうなつても構いません。営倉送りにしても構いません。その代わり交換条件として他の子達に休みをあげて下さい。」

その言葉を聞いた提督はニヤリと嗤つた。

「貴様、何を勘違いをしている？」

鳳翔は提督が何を言つているのか意味がわからなかつた。

「交渉というものは人間同士でやるものだ。貴様ら兵器とやるものではない。警備兵、こいつを営倉へぶち込め！」

提督が言うと警備兵が入ってきて鳳翔を拘束し引きずり出す。

鳳翔は唚然としていたがハツと我に返り懸命に避けんだ。

「どうか！少しだけでもいいんです！彼女達に休息を！」

しかし、その言葉は金色に装飾された執務室の扉が閉じて遮らえてしまった。

そして一人となつた提督。

「さて、今日の夜伽は誰にしようか……」

このあとに何が起きるかも知らずに呑気にタバコをふかしながらそう呟いた。

5分後

当該鎮守府

パラパラパラパラ

提督は執務室で雑誌を読んでいた。すると何かが遠くで聞こえた気がした。

「ん？なんだ。ヘリコプターの音がするような。」

気になつた提督はレーダー室に電話をかけた。

鎮守府には対空監視レーダーがありこの鎮守府にもある。違うところは艦娘が監視しているのではなく、提督の私兵が監視しているだけだ。

「提督だ。何か外で音が聞こえたのだが、レーダーになにか写つてないか？」

暗闇のレーダー室で監視員は一度レーダートレースが一周するのを待つてから報告する。

『いえ、なにも。至つてクリアです。』

レーダーには何も写つてないというのを聞いた提督は自分の勘違
いと思つた。

「ふむ、そうか。それなら良いのだ。悪かつたな。」

提督は電話を切つた。そこへ

コンコンコン

執務室の扉を叩く音が聞こえる。こんな時間に来るというのは夜

伽の艦娘しかいない。

「入れ。」

提督は今日の相手は誰かと楽しみにしていた。

「榛名です。今夜の夜伽に参りました……」

「よし。ならば今日も……」

そこで提督の言葉が途絶えた。耳に聞こえるのはヘリコプターのローター音。だが、前より大きく聞こえていた。提督はどこか訓練でもしているのかと窓に近寄る。そこで目にしたのは鎮守府内のグラウンドでホバリングしているヘリコプターがいた。

ヘリコプター内

「突入班！ 降下地点だ！」

パイロットが叫んだ。

班長と呼ばれた女がヘリコプターがホバリングした野を確認して叫んだ。

「R降OCK, N開 R始OLL!!」

「GO! GO! GO!」

班員達が勢いよく降下していく。降下が終わり地上に着いた班員は周りを警戒していた。

「降下後は速やかに班別行動をせよ！」

「「「「「了解！」」」」

全員が降下を完了するとヘリコプターが離れていく。離れ際にパイロットが無線を入れる。

『我々は退避する。Savior 救世主達、幸運を祈る！』

その言葉を聞いた班長は班員に指示を出す。

「セイバー班長01から各員。行くぞ！」

「「「「「応！」」」」

Savior 班は予定通り二つの分隊に別れて行動を開始する。

これからこの鎮守府のお掃除が始まる。

執務室

グラウンドが見える窓を見て呆然としていた。そこにはホバリングしているヘリコプターから兵士らしき人間が降下しているのである。

提督は慌てて電話取つた。

「なんだこれは！どうなつている！」

提督はレーダー室に繋がつてゐる電話を掛ける。しかし、帰つてくる言葉は狼狽える声だつた。

『すいません！ですが、レーダーに全く反応がなかつたんです。気づいた時にはもう鎮守府内に入つていて……』

提督は頭に血が上つてゐるのか顔を真つ赤にして電話口に怒鳴り散らす。

『そんな理由あるか！あれはヘリコプターだぞ！レーダーに映らないわけないだろ！』

監視員は自分の予想を提督に言う。

『奴らは山の間を通つて来たんではないんでしょうか？』

「なに？」

提督は驚いていた。山の間は2m程しかないのであるから。そんな所を飛ぶなど自殺行為にも等しいからだ。

そんなことを考えている時にハツと正気に戻つて提督は指示を出す。

「それより緊急警報だ！警備兵を展開しろ！」

『りよ、了解！』

『ビイー!! ビイー!! ビイー!!

「命令違反をした艦娘もいたな。罰としてそいつも出動させろ！」

『これがこの提督の最後の命令だつた。』

Savior班 第一分隊

Savior班は二つの分隊に分かれ行動していた。第一分隊は執務室と警備室。第二分隊は地下の倉庫。

第一分隊の分隊長のあの女は執務室と警備室がある棟の階の廊下を前進していた。

その時に警報が鳴り響く。

「ヒューウ やつと警報が鳴ったねえ。奴らの練度が分かるわ。さぞかしのんびりまつたりトランプでもしてたんだろうね。」

そう軽口を叩いていると、先頭の班員が叫んだ。その同時に銃声が聞こえた。

タタタタタタン!!

「コンタクト!! 12時の方向! 距離20m!」

班長は慌てる部下達に冷静に指示を出す。

「反撃だ! 撃ち返せ!」

指示が出た瞬間消音された銃声が鳴りそこから7.62×51mm弾が目標に向かって真っ直ぐに飛んでゆく。

カシュカシュカシュ!! カシュシュシュ!!

廊下の突き当たりには第一目標である警備室があつた。そこから警備兵が警報を聞き慌てて出たところで第一分隊と会敵した。

警備兵が早く撃ち始めていた。闇雲に撃っていた。今晚は新月の夜であつた。警備兵達は先程まで明るいところ警備室にいたせいで何も見えない。

1人また1人と警備兵たちが倒れていく。

最後の方の警備兵はドアから出てきて直ぐに撃たれていた。

「ぐはっ!」

「うわっ!」

最後の方の警備兵はドアから出てきて直ぐに撃たれていた。

女は無線に話す。

「状況。」

班員達は警戒しながら報告する。

「クリア」

「クリア」

「敵影なし。」

女が被害状況を問う。

「こちらの損害は？」

「特になし。」

その報告に満足した女は次の指示を出す。

「よろしい。それでは執務室を制圧しに行こう。」

S a v i o r 班 第二分隊

第二分隊は地下倉庫の棟に進んでいた。何処に地下への入口があるのか作戦会議でも最後まで分からずじまいだつた。しかし、地下に進む階段をあつけなく見つけた。

班員は不安になつていた。

「こんな簡単に見つかるのもんでしょうか？」

隊員が分隊長に聞く。

S a v i o r 班副班長兼第二分隊長のハンニバルは答える。

「ああ、何かおかしいぞ。総員警戒しろ。」

階段の中を頭だけたして確認をしていた。その時、中から微かだが声が聞こえた。

「ヤメテ!! ハナシテ!!」

ハンニバルは直ぐに艦娘の声だと判断して叫んだ。

「艦娘の声だ！ 救出任務開始！」

「「了解！」」

隊員は滑るように中へ入つていった。

「フラツシュバンを投げ入れろ!!」

「F i r e ^{爆発} i n ^す t h e ^{ぞ!} h o l e !」

警備兵達が鳳翔を引きずりながら歩いていた。

中は掃除もされておらずホコリや蜘蛛の巣がところ構わざあつた。

監獄のような檻もありその中には憔悴しきつた艦娘達もいた。

「こつちへ来い！」

「やめて！はなして！」

「そう叫んだその時。

「F i r e i n t h e h o l e!
ファイアインザホールー！」

そんな声が聞こえた。鳳翔を引っ張っていた警備兵や他の警備兵が何事かと地上に出る階段のところを注視した。すると、何かが転がってきた。そう思つた時。

「バンツ!!! キイーーン!!!!

「GO! GO! GO!」

その叫び声と同時に消音された銃声が鳴つた。

カシュシュシュシユ!! カシュ！ カシュ！

警備兵は何も出来ずただバタバタと倒されていつた。

銃声が鳴り終わると男の声がした。

「報告！」

「クリア」

「クリア」

「ここ汚いなあ！」

1人を除き正常な返答が帰つてくる。

そして、拘束され元警備兵の下に埋まっている鳳翔を隊員が見つけた。

「要救助者発見！大丈夫ですか？痛いところなどはないですか？先ほどの光や音は大丈夫ですか？」

鳳翔は助けが来るなど思つてもいなかつた。そして、助けが来たことに理解が追いつかなかつた。理解が追いついた時、目から涙がこぼれた。そして泣き叫んだ。

周りを見ると檻の中にいる艦娘達も発見した。ところがその艦娘達は助けが来たことに気づいていなかつた。

「こりや相当ひでえな。」

ハンニバルは咳き無線で報告する。

「マジック、セイバー01。こちらセイバー02。地下の制圧を完了。ここに二人を残し他の艦娘を救助する。残りは第一分隊に合流する。」

『マジック了解。アウト』

『セイバー01了解。さつさと来なよー。三分後に合流。場所は執務室前。アウト』

ここでハンニバルは分隊を分ける。

「06、07。お前達はここに残つて他の艦娘た達の救助。08はついて來い。」

「「了解」」

そして、ハンニバルともう1人は合流するために階段を駆け上がり廊下を走り出した。

Savior班第一分隊

女は無線交信を終えて執務室前に向かおうと階段を登り最上階に達した時に何かが光るのを見えた。そして叫んだ。

「伏せろ!!」

全員が伏せた。その刹那、先頭を歩いていたポイントマンが立つていたところに砲弾が飛んできて後ろの壁を抉つた。

「ちつ。こここの提督も大概なクソ野郎だな。」

女は舌打ちをして悪態をつく。

隊員が報告する。

「前方に艦娘。駆逐艦と思われます！どうされますか？」

女は報告を聞きながら無線を手に取る。

「見たらわかる。マジック。こちらセイバー01。艦娘と会敵した。指示をこう。」

しかし、本部は馬鹿なことを言つてくる。

『セイバー01。こちらマジック。攻撃しても通常兵器は通用しないマジック』

い。近接戦闘で……』

「そんなこと出来るはずがないだろう！」

女は叫んだ。生身の人間が艦娘に近接戦闘を挑むなんて自殺行為である。もつと罵倒しようと女が息を吸つた。そこに無線で割り込んでくる声があつた。

『セイバー01、マジック。こちらスナイパー01。麻酔弾で狙撃が出来るがどうだ？』

S I A Tのスナイパーユニットである。

彼らは突入班を支援するために鎮守府の近くの山に潜伏していた。彼らは良い提案をする、と女は思つた。それは本部も同じようだつた。

『スナイパー01。こちらマジック。その案があつたな。麻酔弾の使用を許可する。一発で仕留めろ。』

『了解。セイバー01へ。注意をそちらに引き付けてくれるか？時間は10秒。』

10秒長いと判断した女は条件を変える。

『5秒だ。それでカタをつけてくれ。』

スナイパーユニットは文句も言わずその条件を飲む。それだけ腕に自信があるのだ。

『了解した、幸運を。アウト』

『頼むよ。』

女は部下達に話す。

『聞いてたな。5秒間、こちらに注意を引きつける。行くぞ！』

『「応！」』

そして隊員達は撃ち始める。

カシュ！カシュ！カシュ！ カシュシュシュシュ！

当ててはいるが傷はついていない。しかし、確実に注意は引けた。

そして艦娘が次弾を発砲しようとした時。

スナイパーが発砲した麻醉弾が廊下の窓を突き破り艦娘に命中した。

艦娘は何が起きたかわからずに倒れてそのまま眠ってしまった。

女は見事な狙撃に舌を巻きつつ自分の部隊のスナイパーユニットに背中を任せるのが安心できた。

麻醉弾が艦娘に命中した。

「スナイパー01。こちらセイバー01。ナイスショットだ。礼を言う。」

『どーも。そこから先はクリアだ。執務室のおつきい粗大ゴミ提督を回収してきてくれ。アウト。』

そう言いながら隊員達は全方向を警戒しながら小走りで移動を始めた。

合流時間丁度に両分隊が執務室前に到着した。

執務室の扉はほかの部屋と違い金で装飾されたいかにも趣味の悪い扉だった。

「それじゃ、突入しましょ。」

そう言いながら女はフラツシュバンを手に取り部屋の中に投げ込んだ。

コロコロコロ

バンツ!!! キイーーン!!!

爆発した瞬間隊員達が突入した。

「GO! GO! GO!」

広い執務室で何も武装していなかつた提督がフラツシュバンの光を直視してのた打ちまわっていた。

「うわっ！ 目が目が！」

女は手に書類を持つてこう告げる。

「S I A Tです。貴方には艦娘人権法に違反していたため、逮捕状が出ています。よつて貴方を逮捕します。時間取つて。」

女に言われハンニバルが時計を見る。
マルヒトヨンサン
「0143時。逮捕。」

提督はまだ状況が読めていない様である。

「前が！ 前が見えない！ どうなつているんだ！」

「まともに見ちやつたのかー。そりやご愁傷さま。」

そう言いながら班長の女が提督の手に手錠をかけた。

ガチャ!!

提督は自分の手に手錠を掛けられたことに気づいて必死に抗議する。

「な！何をする。私は提督だぞ！こんなことをしていいと思っているのか！」

女は提督を黙らせる言葉を言った。

「何か勘違いされてませんか？貴方は元提督だ。これ以上暴れんな。」

そして、女は無線で報告する。

「マジック。こちらセイバー01。当該鎮守府の提督を逮捕完了。任務終了。憲兵隊を要請する。」

『セイバー班各員。こちらマジック。ご苦労。鎮守府内の放送器具を使用してこの鎮守府は監査局監察課の暫定支配下に置かれたことを放送しろ。』

「了解。アウト」

女はそう言い無線を切り、執務室の壁にある放送機器の電源を入れマイクに話しかけ放送する。

『あーあー。コチラはSIAATである。この鎮守府の提督を艦娘人権法違反により逮捕した。よつて、現時刻を持ちこの鎮守府の職務停止。そして鎮守府は暫定的に監査局監察課によつて支配する。我々は艦娘に対しても危害を加えない。なお、現在この鎮守府にいる警備兵に告ぐ。今から10分以内にグラウンドに武装解除して投降せよ。さもなければ銃殺もやむを得ない。以上。』

そう言い終わると、女は安堵混じりのため息をついた

他の隊員達は元提督を拘束していたり、書類などを押収する準備をしていた。

その中でハンニバルは執務卓の下に艦娘が隠れているのを見つけた。

「そこの君、もう大丈夫だよ。怪我はないかい？」

ハンニバルが声をかけた。

そこに居た艦娘は大きな悲鳴をあげた。

「すいません！すいません！殴らないでください！」

その悲鳴は執務室に響いた。

女はハンニバルに向かつて怒鳴つた。

「貴様何をした！」

ハンニバルはしどろもどろしながら話した。

「いえ！何もしておりますません！」

そこにハンニバルを見ていた隊員が班長に進言する。

「班長！自分も副班長を見ていましたがただ話しかけただけであります！」

その証言から導いた結論は

(P
T
S
Dか……)
心的外傷性ストレス障害

女は呟いた。

「こりや大変だな。こここの新任提督は。」

ここに自分の同期が入るなんて思つてもみなかつたことである。

第一話　副課長と瑞鳳

副課長と瑞鳳

快晴と迄は行かないが、十分に晴れ渡る空。その下に視線を移せば、仄かに上下する穏やかな水平線が視界に入り、その水平線向こうからは心地の良い微風が手を伸ばし、我々の居る“軍港”を吹き抜けていった。

微風に揺られ立つたざざ波が、コンクリートの桟橋をちやぶちやぶと叩き、音を立てる。風の流れが一瞬変わり、背にした整備ドックや倉庫から鉄や油の匂いが運ばれてきて、我々の鼻腔をくすぐつた。

今日の海は穏やかなもんだ。それに随分と港の雰囲気もいい。この鎮守府（ここ）は悪くなさそうだ。と軍服をきつちりと身に纏つた彼は、咥えた煙草の紫煙を深く吐き出しながらそう思った。

「ケホケホ、やめて下さいってタバコは。体に毒つて何回言えばいいんですか？」

小さな咳と抗議の声を受けた彼はくるりと後ろへ向き直った。

彼の後ろには2人の人物が立っていた。一人は緊張しガチゴチに固まつた憲兵姿の青年と、もう一人は和服、と呼ぶには多少語弊のある服に身を包んだ少女だった。

彼は声からも、経験から抗議してきたのは和装の少女だと分かつていた。少女が頬を膨らませ不満げな顔をしている時点で言わずもがなであるが。彼は悪びれずに表情を緩めると、のんびりとした声で返事を返した。

「んー。でも、これが唯一の休息だからねえ。嫌ならついてこなくてもいいんだよ？」

「いや、監査ですし。ついて行かなきや何するかわからないんですから。これでも監察課副課長の監察艦ですか！」

少女は胸に手を当てて誇らしげにそう言つた。まだ随分と子供らしいその動作に、その笑顔。

大分元気になつたんだな、と彼は少女の様子を微笑ましく思つた。

「はいはい。」

「適当にあしらわないで下さい！」

「ごめんごめん」

「もう。」

粗雑に見える彼の態度を責める少女だつたが、彼に謝られて、可愛らしく押し黙る。

周囲がピンク色にでも染まつてしまいそうな、まるで恋人のイチャつきでも見せられているような、そんな光景が彼らの周りに広がつていた。

一言で形容するなら——

——とても仲睦まじい……と彼らの姿を後ろから黙つて見ていた憲兵姿の青年は思つた。

同時に、これが噂に聞く泣く子も黙る海軍監査局監察課なのか？と困惑もしていた。

これでは緊張してガチゴチに固まつていた自分が馬鹿らしい。恐ろしい人たちではないじやないか。と拍子抜けする気持ちと、いや本性を出してないだけでやはり恐ろしい人たちなのかもしれない。あの”監察課”なのだから、と警戒し続ける気持ちが混ざつて、なんとも居心地悪く思えた。

「んじゃ、詰所に戻りますか。」

「やつとお仕事再開ですね」

そんな憲兵の青年の心情など露知らず、夫婦漫才を終えた彼らはすたすたと港の内部へと足を向けた。

である。

その証明として2人の左腕には“監察課”と書かれた腕章を身にまとつていた。

監査局監察課とは艦娘人権法が制定されたのと同時に発足した課である。

艦娘人権法とは深海棲艦が発生してから半年後、突如として現れた艦娘の扱いを決めるものである。当初、艦娘に対する扱いは国会でも討論となり艦娘に対する人権を認める法律を作成された。

それが艦娘基本法である。

しかし、艦娘の人数が増えていくにつれて超長時間連続任務遂行、人身売買などを行う違法鎮守府、通称ブラック鎮守府が発生し始める。人類の存亡がかかっている時にそんなことを想定していなかつた艦娘基本法では取り締まることが出来なかつた。そのためこれを取り締まるために艦娘人権法であり、その法を駆使してブラック鎮守府を取り締まるのが海軍監査局監察課である。

監査局の局長は海軍大臣が兼務しているため誰にも縛られず独立した捜査権がある。各鎮守府の憲兵からの報告書などを監査しているが、不定期に直接監査として監察課から担当官が来ることもある。

2人は出会う艦娘一人一人と挨拶をしながら憲兵詰所に戻つた。

詰所の中に入るとそこには資材管理、出撃回数、遠征回数、演習回数などが記載されている山済みの書類が二つほどあった。

やつと作業が再開されたと思った憲兵だつたが

「疲れたら休憩にしよう。憲兵くん、そんな所にずっと立つてなくていいよ。でも、コーヒーレンタルてくれるかな？」

智樹 副課長
智樹は集中力が続かない人間であつた。

瑞鳳は時計を見て智樹に向かってお小言を言う。

「また休憩ですか？まだ1時間も経つませんよ？さつきだつてタバコが吸いたいから港に行こうって言つたじゃないですか。でも、コーヒーがあるならコーヒーにあういいうお菓子買つてきたんですけど食べますか、憲兵さん？」

瑞鳳も小言を言いいつつもその提案に乗つてきた。

そこを智樹がつつく。

「ノリノリじゃないの」

「うつ」

痛いところを突かれたかのように瑞鳳が呻き声を挙げる。

(これって監査なのか?)

憲兵は詰所の端っこで直立不動になりながら戸惑っていた。

これは只の恋人同士のいちゃつきである。

「クーン 憲兵クーン、聞こえてるかい？」

少しほーつとしていたようだ。智樹の声が聞こえなかつたようだつた。

憲兵は慌てて返答する。

「はつ！すいません。今すぐ取り掛かります！」

回れ右をして動き出そうとした時に智紀が声を発した。憲兵は叱責の声が飛んでくるのかと怯えた。

しかし…

「あ、ついでにもう一個椅子用意しとくよ。」

「は？なんででしよう？」

拍子抜けしてしまって思わず聞き返してしまった。

智樹はなんでそんな質問をするのか疑問に思いつつ答える。

「何でつて、君も休むからだよ。3人分でコーヒーよろしく」

「は、はあ。わかりました。」

憲兵は給湯室でコーヒーを淹れながら考えていた。コーヒー豆を挽く音が詰所の中に響く。

(憲兵の訓練の座学の時に聞いた話と全く違う……)

憲兵が教育隊の時の教官は、

「監察課はエリート揃いである。そして、少しのミスでもそれを指摘していくる厄介者だ。我々の本業を奪つた拳銃、上にもなつた奴らだ。血も涙もない奴らだ。」

と、聞いていたのだが。

「なにこれうま！憲兵くんもほら！食べな食べな！美味しいよこれ！」

「なんで副課長が勧めてるんですか。私が買って来たんですよ？でお

味はどうですか？憲兵さん！」

憲兵がコーヒーと自分が座る椅子を持ってきて座ると2人が親戚の子供にお菓子を与えるかのように勧めてきた。

憲兵はその2人を見て呟いた。

「普通のええ人やん」（ボソツ）

憲兵は自分の出身地の言葉が出ているのに気づいてなかつた。そして考え方改めて、あのクソ教官め、と心の中で呟いた。

（憲兵君は関西の人なんだ。）

（憲兵さんは関西の方なんですね。）

2人は心の中で出身地の言葉が聞こえて呟いていた。

それから少し雑談があつたところで、ふと智樹がコーヒーを飲んでから憲兵に話しかけた。

「てか、憲兵くんの入れるコーヒー美味しいねえ！なんかガリガリつて音も聞こえたし、専用の機械とか豆とかこだわつてんの？」
「ええ、実家が喫茶店だったので入れ方は叩き込まれました。豆は実家から送つてきてもらつてます。」

憲兵は自分の淹れたコーヒーが褒められて少し嬉しかつた。親には一回も褒められたことだかなかつたからだ。
「良いなあ。僕らもそういうのにするように課長に言つてみようかな？」

智樹が提案するが瑞鳳は口をへの字にしながら考えて答える。

「いやー課長は飲めたらなんでもいい派ですし、ダメじやないですか

ね？」

その回答が不満だつたようで椅子にもたれながら瑞鳳に楯突く。

「そんな事言うなよ瑞鳳！」

そんなことは関係ないとばかりに瑞鳳は智樹の前に書類の山を降ろして仕事を急かす。

「そんなことより仕事してください！まだいっぱい残ってるんですから！」

「うひいー」

これがエリートなのか？

憲兵はやはり疑つた。

その時、書類の隙間から智樹の声がした。

「でも、こここの鎮守府は助かるよ。」

「は？」

「いや、こここの報告書は簡潔まとめであるから読みやすく監査もしやすいし、艦娘達も僕らを見ても怯えない。そして、心からみんなが笑つてる。君もいい所に配属されたね。」

「……！」

憲兵は驚いていた。

この鎮守府に入つてから艦娘は数人しか見ていない。そして何より、書類しか見ていない。

つまり、1回も建物内の監査はしていないのである。

「何故そんなことがお分かりになるのですか？」

憲兵が驚きを隠せずに聞いた。またもや書類の隙間から智樹の答
えが聞こえてきた。

「ん？ 僕トイレに行つたでしょ？」

「はい。」

「その時にちよつとね。」

憲兵は声が大きくなつてその答えに驚いて聞き返してしまつた。
「たつた1分でお分かりになるのですか！？」

「分かるよー。いいとこと悪いとこぐらいは。でも、見分け方は言わ
ないよ。」

聞くつもりは無かつたが疑問に思い聞いてみる。

「何故ですか？」

「そこだけ良くして偽装する人が時々居るからね。」

憲兵が嘆息していると

憲兵詰所の扉を叩く音が聞こえた。

「どーぞー」

「いや、副課長が言つちやダメでしょ！」

「あ、そだつた。いつもの癖で」

智紀が返答をして瑞鳳が怒る。智樹が言い訳をしていると、
「どーもー！」

、この提督がやつてきた。

「やーやー、やつとるかねえ？」

、この提督はほかの鎮守府とは違ひ女の提督である。まだ男社会

が根強く残っている海軍では珍しいことである。

立ち上がりて智樹が受け答えをする。

「ええ、お陰様で他のどことは違つて早く終わりそうですよ。」

提督は座りなさいと手を上下させる。

「そりや良かつた！まとめた甲斐があつたねえ、憲兵君！」

「えつ！見てらしたんですか！」

憲兵は自分に話が回つてくるとは思つてもなかつたようで鳩が豆鉄砲を食らつたかのような顔をしていた。それと自分の仕事を見られていたということでも驚きつつ返答した。

提督はそれを知つてかはわからないが続ける。

「当たり前だよ。あんなに夜遅くまで電気がついてたら誰でも気づくわよ！」

「ありがとうございます//」

「この憲兵君は眞面目でみんなのストレスセラピーもしてるんだよ！」

どこまで見てるんだ、と嬉しいを通り越して怖くなつた憲兵が少し顔を引きつらせていたがここで智樹の言葉がその考えを遮る。

「そりやす~い！瑞鳳、この子の勤務評価上げといて。」

「わっかりました！」

「そんないですよ！」

「いやいや、眞面目にやつてる子の評価を上げるのは普通だよ。」

憲兵は思わずそこまで評価が上がつた。そして、大学で心理学を学んどいてよかつたと心の底から思つていた。

憲兵の評価が上がつたところで提督が話し始める。

「で、副課長は明日に帰るんでしょ？どうせここで止まるんだしここの食堂で夕食でもどう？」

「そうですね、お誘いを受けましようか。それでいいね、瑞鳳？」

「はい！大丈夫です！」

智樹は瑞鳳に確認を取つてから提督に返答しようとすると。瑞鳳も笑顔でその誘いを受けるように首を縦に振る。

その返答に満足した提督は満面の笑みで詰所のドアに向かう。

「んじゃ、また夜にねー！」

「はーい。」

満面の笑みのまま手を振りつつドアを閉める。
その音を合図に智樹が気合を入れ直す。

「よし、仕事を片付けますか！」

「はいっ！」

瑞鳳も返事をして仕事を再開する。

コンピューターのキーボードを叩く音や報告書の紙を捲る音、智樹
が唸る声、判子を押す音がする中、憲兵は仕事をする二人の背中を見
て思つた。

(監察課つてこわいひとじゃないんだ。)

出会いつて最初から思つていたことである。

第二話 食堂での対決

食堂での決戦

時計の針の進む音が幾度となくなり続け長針が三週ぐらいした。

その時にはもう監査はほぼ終わりかけていた。

1900
ヒトキユウマルマル

時間になつた瞬間に憲兵詰所の扉は蹴り開けられた。

「「?!」「

監査をしていた間何も喋つておらず静寂な時間が続いていたためかその音に詰所にいた全員が心臓が止まるほど驚き声にならない声を出していた。

「ご飯のお呼びたしだよーーー！」

詰所の中にいた人達のことを何も思っていないのか提督の呑気な声に智樹が抗議の声をあげる。

「いきなり扉を開けないでくださいよ!! 寿命が縮んだ気がしますよ！」

「あははー、ごめんごめん！でも、お腹空いたから呼びに来たよ！」

確かに時間は決めてなかつたがお腹が空いたから誘いに来るとは自由奔放だなあと思いつつ仕事机を見る。その上にはほぼ終わりかけの仕事しか残つていない。食事に行くタイミングとして出来すぎているぐらいである。

「今日の分の仕事も終わつたから行きますか。」

「そうですね。行きましょう！」

瑞鳳も机の上の仕事の量を見て返答する。

「それでは、自分はこれで。」

「あれ？憲兵君は来ないの？」

「ええ、自分は今から夜間巡回に出るので。」

「そーかー。んじやまた明日ね。」

「はい、お疲れ様でした。」

「憲兵さんも頑張りすぎないでくださいね？」

「ありがとうございます！」

憲兵は装備を身につけて詰所を出た。

「では、食堂にいざ行かん！」

「おー！」

提督達も詰所を出て食堂に向かつた。

~~~~~

こんばんは。私はこの提督の秘書艦 大淀です。

今日の提督は朝からいつもより2倍ぐらいテンションが高いです。  
理由は……副課長さんが来たからです。

提督は来客があるとテンションが1.5倍なんですが今回は副課長さんなんで2倍です。

だから…

「さーておふたりさん！右手に見えますのが執務室でーす！次に左手に見えるのが船渠でーす！」

「いや、見たらわかるけど……」

「いいのいいの！雰囲気だけでも楽しもうよ！」

なんでバスガイドの服なんでしょう。なんで持つてるんでしょう。  
なんで旗まで持つてるんですか？何でうちの鎮守府の名前が入つて  
いるのですか？疑問が多すぎます！

私は後でしっかりと聞き出さなければ、と心に決めました。

~~~~~

「そして間もなく食堂です！今しばらく歩いてださい～！」

（（ノリノリだ））

「着いたよー！」

そして提督は食堂の扉を開けた。

食堂の中では夕食時であつたのか多くの艦娘が食事をしていた。
それを見て智樹がつぶやく。

「賑やかだねえ」

「賑やかですねえ」

「そりや一番人が多い時に来たもん。」

その光景を見て智樹が遠慮がちに言う。

「邪魔にならない？」

「ならないよ！みんなフレンドリーだか：おわふつ！」

提督が吹っ飛んだ。なぜならある艦娘が吶喊してきたからだ。それは

「しそえ！一緒に飯食べましょ！」

雪風である。

「ゆ～き～か～ぜ～！いきなり飛びつかないでよ！ビツクリするじゃ
ない！！」

提督が怒る。しかし、雪風はそれに耳も傾けない。

「すいません！しそえ、この人達は？」

「ああ、この人達は長い名前の部署の副課長とほか1名だよ。
『長い名前の部署の副課長の畠中です。』

「ほか1名の瑞鳳です。」

提督の後に2人が自己紹介をした。

「雪風です！よろしくお願ひします！」

「んじや、食堂には日替わり定食しかないからね。トッピングもある
からこそ自分で！席とつてくるよー！」

雪風の手を握りながら提督が席を取りに行つた。

「ご飯取つてくるか。」

「ですね。」

智樹と瑞鳳は片手に一つづつお盆を持って提督のところに向かつた。今日は金曜日である。つまり今日のメニューはカレーである。

席に着くと提督と雪風が今や遅しと待っていた。

「おー、今日はカレーだつたか！」

「しけえ、今日金曜日つて忘れてたんですか？」

「うん、最近仕事が忙しくてさー」

そういう提督の目の下には薄ら隈ができていた。手にもインクがついているのを智樹と瑞鳳は気づいていた。

「そーなんですか！しけえ、体に触りない程度で頑張つてください！」

「うむ!!」

その頃智樹と瑞鳳の間では戦争が起きていた。

「トンカツ下さいよ！」

「いやだ！等価交換だ！」

「だから、なすの素揚げあげますから！」

「なす嫌い！」

バチバチバチバチ

監察課の2人がメンチを切りあつてている。

それ雪風あたふたとしながら見ていた。

その理由は少し時間は遡る。きつかけはトッピングの交換の交渉からだつた。

~~~~~

『あ、そのトンカツ美味しそうですね。一切れください。』

『ん、いいよ。何と交換する？』

『そうですね、私のトッピングのナスの素揚げなんで一つあげます。』

『えつ』

『えつ？ダメですか？』

『なす嫌いなんだよ……』

『その年で好き嫌いですか？食べなさい！』

『瑞鳳は僕のお母さんか！』

『な、何を言うんですか!!ていうか、トンカツください！』

『いやだ！』

~~~~~

今に至る。

智樹はナスが大嫌いなのだ。あの味と言うか食感が苦手なんだよ。（本人談）

そして、戦いの結果はトレードは成功し智樹は茄子を鼻をつまみながら丸のみした。

「でも、各鎮守府によつてカレーの味は違うね。」

「そうですね。」

「そなんですか？」

各軍艦によつてカレーの作り方が違つたりするが、鎮守府でも同じくことが言える。

「ええ、このは甘口で私は好きですよ。」

「瑞鳳はお子ちゃまだねえ。」

「むつ！」

「ごめんごめん。」

智樹は辛口派。瑞鳳は甘口派である。

そこから談笑しつつ食べ終えて、

「「「（）ちそうさまでした！」」

食堂から出て提督が来客用の部屋に案内して

「明日帰るんだつたんだよね？今日はゆっくり休んでいきなよ！」
と言つたのでお言葉に甘えてしつかりと休んだ。

翌日

マルロクマルマル

0600

パパパパー パパパパー パラララツパ パツパパー

起床ラツパが鎮守府中に響き渡り各艦娘が起き、運動場に集合して点呼を受けている。それから提督が拡声器で今日の予定を言つて解

散した。

その頃の監察課の2人は

「くがーーー」

来客用の部屋でカーテンを閉めて惰眠を貪っていた。

そして 0800マルハチマルマル

「おはよーございます。」

2人は同時に起きて食堂に出てきた。食堂には人もあまりおらず昨日とは打つて変わつて広々と使つていた。2人とも寝癖が付いたまま来ていてみつともなかつた。そこに憲兵が朝御飯を用意してくれていた。

「あ、おはようございます。朝御飯を食べながらでいいので今日の予定を聞いてください。」

「ふあい。(はい)」

「えー、今日の仕事はありません。」

「ふあ!?」

2人はその言葉を聞いて完全に目を覚ました。
「なんでなんで!」

「今日の分の書類は今回の監察内容に含まれてないと、先ほど本部から通達がありました。ですから、監査は昨日で終了ということです。なので、お迎えが来るまでおふたりは自由です。」

急に暇になつた2人は顔を見合せた。そして今日やることを大きな声で言つた。

「よし!釣りをしよう!」

そのまま朝食をかけこみ憲兵に質問する。

「憲兵君！釣り道具つてここらに無いかい？」

「いえ、ないと思いますけど…」

いきなりの質問で狼狽える憲兵。その時、後ろから黒い影が忍び寄っていた。

「フツフツフー。あなた達が欲しているのはこれかなあ？」

提督が釣り道具を持つて現れた。

智樹はそれを見て瑞鳳と顔を見合わせながら同時に頷いた。

「よしつ！釣りだア!!」

「私も一緒に行くよー！」

「いいですよー！どっちが多く釣れるか勝負です！」

「その勝負受けて立つ!!」

そのまま3人は食器を丁寧に返却口に返して食堂から出ていった。

憲兵はそれをただ呆然と眺めていた。そこに秘書艦である大淀が勢いよく食堂の中に入ってきて憲兵に質問した。

「憲兵！あのサボリ魔提督ここに来ましたか!？」

「ええ。でも、またさつき監察課の方々と釣りに行きましたよ…」

「D a m n i t !!ともかく情報ありがとうございます！」

秘書艦の人もあんな言葉使うんだ…と思いながら憲兵は自分の業務に戻った。

そして、サボリ魔&監察課の2人は釣りを（なお1人は離脱）迎えが来るまでしていたが…

ぼうずであつた。

そして迎えが来た。

提督が大きく手を振っている。

「またきてねーー！」

雪風も一緒に来ていて大きく手を振りながら
「楽しみにしてまーす！」

と、大きな声で言つていた。

その傍らに憲兵が苦笑いをしながらたつていていた。憲兵は今回が
初めての監査を体験したがとても良い経験をしていたと思った。し
かし、提督と雪風を見てこう思った。

（監査でまた来てねつていいのか？）

当たり前の反応である。

第三話　監査局本部と愉快な仲間たち

監査局本部と愉快な仲間たち

鎮守府の監察が終わり智樹と瑞鳳は市ヶ谷にある監査局本部に向かって歩いていた。深海棲艦が発生する前は自衛隊を治める防衛省があつた市ヶ谷だが、現在は自衛隊は日本軍となり陸海軍と再編して防衛省の役目は大本営に引き継がれて横須賀に移つてしまつた。

無用の長物となつた市ヶ谷の元防衛省の建物は解体され更地となつていた。そのまま他の官庁を建てるかもしないと思われていた。その時、艦夫人権法が制定され監査局が発足して本部を建てることになり、市ヶ谷の更地に白羽の矢が立つた。

各地にある鎮守府の赤レンガのようなものではなく五階建ての本部棟ビル、隊員宿舎、整備場、ヘリポートがある。

智樹と瑞鳳は監査

から帰つて來ていた。2人は市ヶ谷駅で降りて駅から出でていた。目の前には元防衛省、現監査局本部のビルが見えていた。2人は歩き出す。

智樹が歩きながらポツリと言う。

「いやー帰つてきたねえ。」

瑞鳳は毎回毎回その言葉を監査終わりに聞いていた。可愛く小首をかしげながら質問する。

「毎回言いますねそれ。なんで言うんですか？」

「んー無事に帰つてきたなあつて意味で言つてる……のかな？」

「のかな？つて。それでいいんですか？」

瑞鳳は呆れながらため息をついていた。

その時2人の頭上でヘリコプターの爆音が降り注ぐ。2人ととも上を見ると1機のMH-60ブラックホークが飛び去つていき本部のヘリポートに着陸していくた。

智樹がヘリ飛び去つてから思い出したかのように言う。

「あー僕達が監察に行つた時に強制捜査があつたのか。」

「あつ！ そうでしたね。大丈夫だつたでしようか？」

瑞鳳も同じく思い出し隊員達を心配する。

信号で止まりぼちぼち通行証を出さなければという感じで智樹がカバンの中やポケットの中をゴソゴソしながら瑞鳳の間に答える。

「あつこの隊員は精銳だから大丈夫だよ。まず、そちらの雑魚に殺られるぐらいなら „まつしー“ が殺すでしょ。」

「پ、そうですね。あの人と互角なのは副課長ぐらいですもんね」

瑞鳳はその回答で口に手を当てて少し吹き出していた。その顔をまた可愛いなあと思いつつ智樹は通行証を探しながら一つ訂正を入れる。

「正確には僕と相棒だね。」

「相棒つて副課長と勝野大尉の同期の？」

「うん。」

瑞鳳はどんな人なの想像しようと自分の手を頸に当てて探偵のような仕草をして考えた。

そういう話しているうちに本部の正門にたどり着いた。
だが、

「どこにも通行証がねえ!!」

「ええ！」

本部前にいた衛士が驚いた。

しかし、瑞鳳だけはため息をついていた。

「副課長：私が持つてますよ。はいどうぞ。」

瑞鳳は衛士に自分のと一緒に通行証を渡した。

衛士はポカンとしていたがハツとして通行証をスキヤンし始める。

智樹はある疑問を瑞鳳に投げかける。

「なんで瑞鳳が持つてんの？」

「副課長言つてたじやないです、僕が持つてると無くしそうだから

ら”つて」

智樹は自分の記憶を辿つて思い出す。

{ { { { { { { {

『瑞鳳ーこれ持つてて。監査行つてから監察課のオフィスにそのまま戻るだろうし僕なら絶対家とかに忘れそう。』

『分かりました。でも、渡したこと忘れないとくださいよ。』

《分かつてるよ、んなことわ。》

「あ、ホントだ。渡した渡した！」

語懶か
直線は繋がって喜ぶ智樹
翔鳳はカクツと首を下に落と
した。

そんなことをしているうちに衛士が詰所から出てきて2人に通行証を返す。

「認証しました。おかえりなさい、副課長、瑞鳳さん。」

衛士2人が見事な敬礼で出迎える。

それに返礼しながら智樹と瑞鳳は一緒に言う。

二 たた今帰つてまいりました！」

2人が門を通ると五階建てのビルが目の前に出てきた。これが監査局本部棟である。

この中に監察課、監査課、主計課、情報調査課、尋問課、SIAAT

戦本部 突入班、狙撃班、誤報班等、かたってい
他にも隊員宿舎、グラウンド、ヘリポート、整備場、野外訓練場な

どがある。

2人はそのまま真っ直ぐ歩いて本部棟の中に入つた。入ると広い

エントランスが広がる。

壁際には受付がありそこを通り過ぎる。その先には衛士が2人い

てそここの間にセンサーゲートが3つほど並んでいた。そこに先ほど通行証をタッチする。すると小気味よい音が鳴り自分の目の前のバーが上がり中に入る。

瑞鳳も隣で通行証をタッチしてゲート内に入った。

2人はポケットに通行証を入れて代わりに監査局手帳を出した。監査局手帳は警察手帳のようなものだ。自分の顔写真、名前、階級、所属している課が上にある。下にはこれも警察手帳と同じエンブレムだが桜が錨に変わっている。POLICEと書いてある所には海軍監査局の英語 Naval Inspector Service

e が書いてあり、下には海軍監査局と漢字で書かれている。

智樹は監査局手帳を折り曲げて監査局のエンブレムが見えるよう上着のポケットに入れ直す。瑞鳳は監査局手帳を折り曲げてエンブレム見やすようにしてから手帳についている紐を首から下げた。

本部棟の中には旧海上自衛隊の制服の人々が忙しそうに走り回る。監査局の制服は旧海上自衛隊の制服が採用されている。

そのまま2人はエレベーターに乗った。監察課のオフィスは3階にある。3Fのボタンを押し閉めるボタンを押す。エレベーターが上昇し始めて押しつぶされる感覚が襲う。

「ううう。身長が縮む。」

瑞鳳が小さく呟く。智樹はツッコミたかつたがなにか地雷な気がしてやめた。

そんなことを考えていると3階に着きチーンと金を叩いた音が鳴ると同時にドアが開く。

エレベーターから出た瞬間完全装備の男達が目の前をゾロゾロと歩いていた。その中の1人がこちらに気づいて敬礼をしてから話しかけてくる。

「あ、副課長。監査お疲れ様です。」

ハンニバルことジョン・ニコラス中尉であった。その声に続いて残りの隊員達も2人に敬礼する。智樹と瑞鳳は返礼し手を下ろす。それを合図に隊員達は手を下ろして休めの体制になる。訓練されてるなあと思いつつ話し出す。

「おつかれー。今回のガサどうだつた？クソ野郎だつたー？」

「ええ、大概なやつでしたね。艦娘を我々の迎撃まわしてきましたし。^{艦娘}パツケージも救助に来たということすらわからないほど衰弱しました。現在は衰弱、怪我をしている者は海軍病院へ。残りの艦娘は現在憲兵隊が聞き取りをして います。」

智樹は今回の鎮守府も相当汚職しているブラックだつたことに悲しみを覚えつつひとつ大事なことを聞く。

「で、今回の可哀想な提督さんは？」

「えー、現在尋問課が尋問中です。課長がすごい笑顔で引きずつていたんですけど…」

ハンニバルが引き攣った笑顔で報告する。

智樹はその光景が頭に思い浮かんでため息をついてボヤく。

「はあー、せめて廃人にならない程度に尋問して欲しいなあ。」

その咳きを苦笑いしながら聞いていたハンニバルが思い出したかのように隊長から智樹への伝言を伝える。

「副課長、多分監察課に班長がいるんですけどなにか話があるその声を掛けて欲しいと言つていました。」

その言葉に少し目を細めた智樹だつたが直ぐにいつものように呑気な声で返事をした。

「んーわかつた。君らも束の間の休息を楽しみなう。」

「「「「「お疲れ様でした！」」「」」」

隊員達が休暇に何をするかという話し声を背に智樹は歩き出す。それを瑞鳳が少し小走りで追いかける。

「以上、報告です。」

「お疲れさん。今回も負傷者無しで嬉しいよ。」

監察課課長室の中で中年の男と若い女が話していた。男の方は監査局の制服に身を包んで書類を見て座っていた。その机を挟んで黒

い戦闘服を着た女は休めの体制で立っていた。座つてゐる男の隣には男と同じ制服を着た艦娘が1人立つていた。

中年の男は監察課課長である浦野春樹中佐である。

ここ監査局監察課を創設した張本人であり艦娘が誕生するまで生身で深海棲艦と戦つた叩き上げ『バケモノ』である。艦娘が誕生して艦娘が作戦行動ができる人数になつてからは憲兵として任務に当たつていたがブラック鎮守府のことを見ると1人で大本営に赴きこの監察課を作り上げた。

その隣にいる艦娘は春樹の監察艦である吹雪である。

まだ艦娘の人数が少なく通常部隊と共に作戦をしている時期に作戦に従事して知り合つた。その時に吹雪が致命傷を負つた時に助けたのが春樹である。以来春樹のことを好きになつた。しかし、そのまま吹戦以降散り散りになり、春樹の行方が分からなくなつた。そのまま吹雪は大本営付きの艦娘となつて半年経つた時、春樹が大本営に来た。そこで新設される監察課があると聞き、その課長に春樹がなると言われていたので秘書艦になりたいと春樹の所へ嘆願した。

なお、2人の左手薬指には指輪があるがこれはまたいぢれか。

向かい側で話しているのは勝野真白大尉である。S I A T突入班班長でありS I A T隊長である。智樹と智樹の相棒との同期である。春樹が話を切り出す。

「で、今回も主戦派の後ろ楯があるヤツだつたかい？」

「それも含めて副課長が来てから話そうかと。」

真白が返答していると、

「ただ今戻りました。」

智樹と瑞鳳が帰つて來た。

真白はこれ幸いと言わんばかりに報告を再開させる。

「では、課長と副課長もいる事ですから今回の主戦派との繋がりを報告します。結果から言うと『クロ』。完全に繋がつてました。それに関係する書類、資材流用に関する書類も工廠から押収しました。ですが、断片的なものでありますので立件出来るのは今回の提督だけかと。」

真白はそう言いきると悔しそうな表情をした。

だが、春樹は手を叩きながら真白を褒める。

「いや、これでも十分成果だよ。断片的でもこれが多くの武器にもなる。それにこの事件を立件したら主戦派の奴らも慌てて何かボロを出すかもしね。そのことを諜報班と情報調査課に伝えといてくれ。」

そこへ黙っていた智樹が真白に質問する。

「今回の心理セラピー必要者及び艦娘の負傷者は？」

「負傷者は数名だ。だが、精神的にやられている艦娘が多数いる。」

智樹は歯噛みする。そして何故自分はそんな時にいなかつたかと後悔する。その表情を読み取った真白がフォローする。

「副課長、そんなに悔しがるな。今回は仕事もあつたんだから仕方がない。」

「だが！」

智樹が反論しようとしたところで春樹が割って入る。

「まあまあその悔しさを次の仕事の時に発揮してくれ。ところで、畠中君。君にはまた監査に行つてもらおうと思う。と言つても監査はしなくていい。」

智樹が首を傾げる。監査なのに監査はなし？何が言いたいのだと言わんばかりに質問する。

「課長…仰っている意味が理解できないのですが。」

「今回の鎮守府は先日ガサに入つた『舞鶴』鎮守府だ。」

智樹は春樹の言葉で理解する。

強制捜査^{ガサ}が入つた鎮守府や泊地などはどんでもなく荒れているところである。そこに後任の新人提督を入れるなど自殺行為にも等しい。だからといってベテランの提督を他の場所から移動させるのは難しい。そこで監察課が同行して仕事内容の指示や鎮守府運営のイロハを伝える仕事がある。

だがこの仕事にはひとつ重大な問題がひとつある。

それは

「課長、今回も治安武器の使用許可を。」

監察課員、新人提督の負傷率が5割以上であることだ。

艦娘は艦装をつけている時はヒトより何倍も強くなる。

しかし、つけていない通常時ではヒトよりも少し打たれ強いだけである。

それでも艦娘は艦娘でヒトよりは強い。

そのため監察課は治安武器（簡易式盾や非致死性ゴム弾使用拳銃など）を携帯し新人提督を守る。

そんな危ない場所だが課長が驚きの言葉を発する。

「わかつてゐるよ。でも、今回は使わないかもね。」

「は？」

智樹が驚く。しかし、春樹は淡々と続きを話す。

「後任の提督は畠中君も勝野君もよく知つてる人だよ。これを見たら今回の武器使用の件も分かるだろう。」

そう言つて春樹は公認提督書類を机の上に置く。2人はそれを覗き込むとこう書いてあつた。

（＊＊＊＊＊）

発 海軍大臣直轄部隊海軍監査局監察課
宛 海軍北部航空方面隊第2航空団第203航空隊所属 中川
総一 少佐

日本海軍舞鶴鎮守府提督の任及び海軍鎮守府付属航空団第66航空隊を編成し指揮を命ずる

以上

平成●●年●月●●日

—あゝゝ…

それはかつての旧友、そして智樹の相棒であり、格闘であればヒトより少し強いぐらいの人間であつた。

春樟が微笑みながら

「監査は来週、それまでに書類等の準備をよろしく
の休暇が終え訓練再開で、以上。」
勝野君は突入班

二二二解一失礼し

智樹 瑞鳳 夏田が都夜を以て、返答し、遠出である

部屋を出た後に智樹と貞白は同時にため息を吐き、舌葉を漏らす。

その近くで瑞鳳が呟く。

「副課長の昔話が聞けるかも。」

瑞鳳も大概タフである。

そこから三人は並んでエレベーターまで歩き始める。歩き

「うかうか、はりこよつてあひつか。妥当な判断だが。」

「そうだね。
でも大丈夫かな？」

眞白も腕を組みながら心配をする。

瑞鳳は少し安堵した顔で諂に害にて入る

ね。
—

しかし、2人は瑞鳳の顔を見て同じように顔を傾げた。

「うう、いい悪いの心配した?」

卷之二

驚き顔で聞き返す。そんな瑞鳳に向かつて智樹は平然と言う。

「あい、より艦娘が危ないよ
何してかすか」

そんな会話をしているところ…

周りの山には雪が残っている所が見える場所で同じ紙を持つた男がいた。そこでは時折、何百人ものを載せて運ぶ旅客機が飛び立っていた。飛び立つたあと直ぐに旅客機が着陸するといったように慌ただしい空港でその男は立っていた。その男は今は亡き航空自衛隊と同じフライトスーツを着ていて、胸の所にはウイングマークが付いており名前の部分には „S. NAKAGAWA“ の文字。

その男、中川総一は自分の所に届いた辞令をもう一度眺めて叫んだ。

「いきなり召集されるとは聞いていたが提督の他になんて航空隊までやらないかんのだーーーーーーーーーーーー！」

その叫び声は航空隊の F-15 J 戦闘機のエンジン音でかき消された。

第四話 訓練と情報の大切さ

訓練と情報の大切さ

薄暗い地下。そこのにある部屋のドアの隣にもたれかかっている男がいた。畠中智樹大尉である。しかし、いつもの監察課の制服ではなくくすんだ緑の戦闘服で身を包んでいた。その上にはレンジヤーグリーンのタクティカルベストを着込み前のマガジンポーチには実弾入りのマガジンが入っている。背中貼つてあるワッペンには上下二段に文字が書かれていて上には『SIAAT』下には監察官の英訳である『INSPECTOR』と書かれている。手にはSCAR-Hが握られている。マウントにはホロサイト、アンダーバレルにはフオアグリップが付いている。

太ももにはレッグホルスターが付いておりその中にはSIGP2 26が入っている。ヘルメットを被つておりヘルメットの後ろにはコールサインであるSavior00の略称である『S—O』というワッペンが貼つてある。

智樹は息を吐くとタクティカルベストのポーチの中から^{スタングレード}闪光手榴弾を取り出す。そして慣れた手つきでピンを抜き部屋の中に投げ込む。爆発音と同時に眩しい閃光。それが終わつた瞬間静かに部屋に侵入。^{ルームエントリー}

中には武装した男が3人、民間人が1人いた。智樹はその武装した男と民間人を一瞬で判断し武装した男だけをなぞるように銃を動かし2連射する。

民間人だけになると智樹は目の前にあつた階段を登る。登り終えるその瞬間に目の前に敵が現れる。それを冷静にナイフで首の喉笛付近を切り裂き無力化する。

2階に上がるとそこにも敵の男達がいた。敵は総勢2人。1人はこちらに拳銃を構えていた。もう片方は人質の頭に拳銃を突きつけていた。智樹はこちらに拳銃を突きつけていた敵に2連射して倒す。

もう1人の方には一瞬息を止めて狙い頭に弾丸を叩き込む。それと同時に弾切れとなる。マガジンリリースボタンを人差し指で押してマガジンを落とす。左手でベストのマガジンホルダーの中から新しいマガジンを取り出し再装填^{リロード}。ボルトリリースボタンを押して2階から下に飛び降りる。

約3mの所から飛び降りると同時に敵が出てくる。こちらに銃を向けてくる敵が3人、右から左に動く敵が1人といった具合だ。着地と同時にレッグホールスターからプライマリのSIG P226を取り出し発砲。こちらも敵をなぞるように銃の先を動かし2連射。最後に右から左に動いているスイッチ付きの敵に当たるとその地下の中にけたたましいブザー音が鳴り響く。

「29秒329！また新記録&自己ベスト更新です！さすがです！」備え付けのスピーカーからそのような興奮した声が聞こえる。その声を右から左に聞き流しつつ呼吸を整えながら銃に安全装置^{セーフティ}をかけて目の前にある部屋に入していく。中に入ると前と右の壁にはロッカーがあり真ん中に大きめの机が2つある。かぶつっていたヘルメットを脱ぎ真ん中の机に置いてからマガジンを抜く。ボルトハンドルを引いてチャンバーの中に入っていた弾を取り出す。マガジンをポーチの中にしまって拳銃も同じように片付け始める。そこからベストを脱ごうとモゾモゾしていると左側の扉から先ほどのスピーカーの声の主、軽巡洋艦夕張が出てきた。しかし、何故か口をふくらませて不機嫌な顔になっていた。

「なんで褒めたのに返事してくれないんですか!?」

「いやー、褒めてくれたのは嬉しいんだけどねえ。なーんか物足りないのさ。」

智樹はそう言いながらベストを脱いで各マガジンから弾を取り出す。

夕張は近くにあつた椅子に座つてぐるぐる回りながら質問する。「物足りないって何ですか？」

「なんか、こう、ね？」

「いやー、わかんないですよそんなのじや！」

「いやー瑞鳳なら分かつてくれそうなんだけど」

夫婦かつ、というツッコミをすんでのところで押しとどめた夕張は話題を変える。

「今日は一緒じゃないんですね。瑞鳳ちゃん。」

「うん。瑞鳳には先に情報課に行つてもらつてる。」

「あれ? 今日は何があるんですか?」

「次の監査が新任提督件だからさ、そこの鎮守府の今の状況が知りたいのさ。」

智樹はそう言つて銃をガンロツカーに入れてベストもハンガーにかけてロツクをかける。

戦闘服のチャツクを下ろして着替えようとしたが夕張がいるのを思い出す。

「夕張さん、着替えるからちょっとでていつてくれるって何持つてんのそれ?」

智樹はその黒と白のツートンカラー『一眼レフ』のものを見て言う。

夕張はそんなことも気にせず手入れをしていた。

「ここの副課長の生着替えを写真に撮つたら金になるぞお…ムフフフフ。」

「夕張さん、最近尋問課の奴らが訓練相手が欲しいって言つてたんだけど君を推薦しようかなあ。」

夕張の顔が青ざめていく。

「夕張、全力で退室します!」

「うむ、よろしい。」

そう言うと夕張は逃げるようになっていった。ちなみに尋問課は先の提督が手が離せないようでそんなことは言われてない。

智樹はいつもの監査局の制服に着替え終わりロツカールームから出た。そのまま右に歩きエレベーターのスイッチを押してエレベー

ターが来るのを待つ。

チン、と音が鳴り扉が開く。智樹はエレベーターの中に入り情報課があるフロアの階を押して扉が閉まる。

しばらくして情報課がある3階に到着した。智樹はエレベーターから出て目の前にあるセキュリティドアにIDバスをかざし網膜スキャンナーに目を当てる。電子音とロツクの外れる音が鳴りドアを開ける。その中には大量のサーバー群がずらりと並んでおり、その奥にある情報調査課と書かれたプレートがついている扉を開ける。開けるとそこには大量のエナジードリンクの缶が転がっていた。智樹はそれを丁寧に何本あるか数えてから目の前にいる血走った目でキーボードを叩く人間らしきものに話しかける。

「12本あるってことは三徹ぐらいかな？」

しかしその人間らしきものからの声は聞こえない。答える声は智樹の後ろから聞こえた。

「まだ二徹ですよ。この子達はもう完全なるカフェイン中毒者ですよ。」

声の主は大淀だった。大淀はこの情報調査課のまとめ役、つまり課長である。その後ろには瑞鳳が大淀にぴったりとくつついていた。

「ちょっと待つてこの子達1日に何本飲んでの。」

「1日に6本ですよ。艦娘だから出来ることですね。」

智樹の驚きながらの質問に対しても大淀は飄々と答える。大淀はそのまま続ける。

「しつかし、今の舞鶴はやばいですよ。前任者は相当なクソツタレだつたみたいですね。これ艦娘じやなかつたらMPじやなくて海軍犯罪捜査局NCISN I Sが飛んできましたね。」

「まあ、NCISは人間による海軍軍人の事件犯罪捜査だからね。その辺はうちと仲良くしなきゃやつてられないよ。ちなみに舞鶴に送られたMPの負傷率？」

「100%です。頑張つて来てください副課長。」

「うへえーやだー痛いのやだ。」

「大丈夫ですよ今回は課長命令で勝野大尉が追随するそうです。」

「やつたね勝ち確じやん！」

「大尉が勝ち確なだけであつて副課長はボコボコにされるんじゃないですかね？」

などと、大淀と智樹が話している近くで、このやり取りを聞いていた瑞鳳がふんすっと気合を入れていた。

そこに今まで黙っていたカフェイン中毒の片割れの1人初雪が瑞鳳に向かつて話しかけた。

「瑞鳳、今回の監査を使つて吊り橋効果を狙うのだ。」

「ふえ？ 吊り橋効果？」

初雪がこいこいとPCに近くに呼ぶ。トコトコとPCの近くにくと、そこにもう1人のカフェイン中毒の漣が瑞鳳の耳元で囁く。「危ない所で瑞鳳が副課長を助けたら、副課長は瑞鳳に惚れるつて寸法よ。」

「な、なるほど！ 頑張るよ！」

「頑張つてきな！」

そのような作戦が計画されているなど露も知らず大淀と智樹は舞鶴への移動方法について相談していた。

「ちょうど新しいMPを輸送するハーフ^{C-130}_{輸送機}が出るんでそれに乗つてお願いします。」

「新しいMPつて言うのがなんかやだねえ。」

「しようがないじゃないですか。それに憲兵隊から”人材は無限にあるわけではない”って嫌味が来てんですよ。なんなら副課長に対応してもらつてもいいんですよ？」

「ご容赦いただきたい。そういえば新任提督はどこで合流かな、てか一緒にハーカに乗るの？」

「あ、その点は大丈夫です。上空でランデブーです。」

智樹は上空でランデブーという言葉を聞いて一瞬頭がフリーズした。

「上空でランデブー？ 何あいつは羽でも生やしたのか？ レツ○ブルでも飲んでんのか？」

そこに瑞鳳が智樹に話しかける。

「副課長は辞令読んでましたよね？」

「うん。でももう忘れた。」

「忘れないでくださいよ。今回の新任提督はそのまま航空隊を編成しそれを指揮せよつて書いてあつたじゃないですか。」

それを言い終わつたあとに大淀が補足する。

「^F_{イー}¹_{グル}⁵_Jが4機編隊でハーケをエスコートするそうです。」

「そういう事ね。了解した。今日はありがとう大淀と廃人達。また差し入れ持つてくるよ。」

「じゃーねー初雪、漣！私頑張つて来る！」

智樹と瑞鳳は手を振りそう言い残して部屋から出ていった。

大淀は2人が出て扉がロックされてから2人の廃人に話しかける。

「なあ、瑞鳳の頑張るつてなんだ？」

2人は声を揃えて言う。

「恋と言う名の個人任務です。」